

大陸(満州)

飢餓・悪疫との戦い

兵庫県 松本直一

私は、大正十二(一九二三)年十二月一日生まれです。昭和十八(一九四三)年徴兵検査を受け、見事甲種合格。徴兵官より「お褒めとはげましの言葉」を頂き光栄でした。内心父母に感謝しました。

歩兵として姫路第四十六部隊へ、昭和十九年二月十日現役兵として入営しました。その当時の我が家の家族状況は

父 健在 国鉄従業員
母 ” 農業 水田四反八畝

姉 ” 他家へ嫁入り

本人 ” 大阪でメリヤス雑貨店店員(勤続五年)

弟 ” 国鉄従業員

と生活は概ね安定しており、私が兵役に服しても格別の収入減、困窮もなく、従って後顧の憂いもなく、切迫する戦局下、勇躍して男児の本懐と、生まれ故郷を出発しました。

入営した姫路の部隊は、第十師団歩兵第三十九連隊の留守部隊で、本隊は既に満州へ進駐していました。約十日間内地の兵営におり、渡満準備に忙しく明け暮れ、特に予防注射が大変でした。三種混合などの注射をされると、高い熱が出るので、初年兵は終日安静にしてベッドに臥床、その間の食事その他の内務はすべ

て古兵がやってくれました。一日間のわか病人で染をさせてもらいました。

季節は二月。厳寒です。入営する時に着ていた私物の被服一式を脱いで、小包便で留守宅へ送り返す。新しい越中褌一つとなり、その上へ官物のジバン、コシタ、靴下を着用し、さらに軍衣（うわぎ）、軍袴（ズボン）を着る。すべて官給品であるが、新兵に与えられるものは古兵の着古した程度の悪いもの。乞食こじきに近いもので、これでキツパリと娑婆と縁を切り、軍隊という別世界の人となった覚悟を否応無く自覚させられました。

約十日間姫路の部隊にいましたが、その間、満州の寒冷地（零下三〇度）へ行くため、防寒用下着、携帯口糧、兵器、弾薬、その他の受領等に毎日忙しく明け暮れました。朝夕の点呼、ベッドの上げ下げ、古兵や上級者に対する呼び方等々の所謂「内務」の習熟、幸いにして私達の入隊時期には「私的制裁」が禁止の時代で助かったと考えます。

さて、いよいよ内地を出発して満州へと向かう。兵営より姫路駅へと行軍する道には、市民の見送りの盛んな光景が約六十年経った今でも瞭に残って忘れられません。列車輸送で博多へ。乗船して釜山へ。列車で北満の佳木斯ジャムスへ。

朝鮮を過ぎて満州へ入ると、二月の寒さはマイナス三〇度。列車の中で座席に腰をかけていると靴の中の足が冷えてたまらない。両脚で地団駄を踏んで暖をとる。もちろん上体も寒いので、肩や背中をこすり合わせて押しくらまんじゅう。顔も素手でこすり合わせて暖をとる。こうして佳木斯の鉄六四六部隊へ転属、第二大隊砲小隊へ配属となり約六カ月初年兵教育を受けました。

何しろ寒い最中で建物の外に長い間出ている事もない。ペーチカを焚いた暖かい室内で大隊砲の学科、砲の分解組立、観測、照準、発射、その他の室内教育。春になり寒さが去ると野外へ出ます。そこで初めての実弾射撃を体験する。反動がきついのを初めて知ったものです。発射音も物凄い。こうして少しずつ

実戦に役立つように育てて行く訳です。

一方、大隊砲小隊には馬がいる。これは厄介なものの。馬がいるのと、いないのとでは雲泥の差です。馬を人と共に生活させる、あの厳しい苦勞は、実際に体験した者でないと分からない。釜山より佳木斯に至る列車輸送では、馬も加わりました。蹄鉄の掃除、水洗、油引きや馬との協同生活には馬の癖にも困らせられます。嘔む、蹴るの悪癖をよくわきまえて接しないと、大変な事故になる。また乗馬訓練も慣れるまでが大変。暴走馬の対策等もある。馬の病気もある。人生到るところ苦勞ありで上を向いて歩こうです。

昭和十九年八月、佳木斯部隊出発。列車輸送。出発時の部隊名は鉄第五四四六部隊。列車は果てしなく続く広野をノロノロと南下する。地平線の向こうに沈む赤い夕日が美しかった。

やがて朝鮮に入り一路釜山へと向かう。灯火管制下の釜山は暗く、いきなり空襲警報の挨拶を受けました。前途への不吉な思いが一瞬浮かんで消えます。

続いて今度は海上輸送で台湾の基隆港へ。連隊本部と連隊主力の乗った「江戸川丸」は細雨降りしきる八月二十四日早朝、基隆港を目前にして港口に潜伏中の敵潜水艦の魚雷攻撃を受けました。

先頭を前進していた「江戸川丸」は最初に狙い撃ちをされましたが、危機一髪、一、二メートルで魚雷をかわしました。この魚雷は「江戸川丸」の右後方を前進中の戦車を積んだ我が方の輸送船に命中、同船は轟沈しました。私は「江戸川丸」に乗っていて助かり九死に一生を得たのです。多数の死傷者や海没者を見て初めて戦争の悲惨さを思い知らされました。

台湾に上陸した第十師団は、台湾西海岸の防衛を担当し、台北の西方で陣地構築に励みました。

昭和十九年十二月、台北―台南―高雄と列車輸送、高雄港で八〇〇〇トン級の輸送船に乗り、パシ―海峽を経てマニラ港へと進みました。この船には人、馬、砲を積み、船の最底部には馬がいる。この馬の出す糞尿の悪臭、湿度等は船中に満ちて環境の汚染はこの上ない。加えてパシ―海峽が大荒れで波が高く、乗船は

波の上下にゆられて護衛の駆逐艦の姿も見えないぐらいでした。

デッキの上へ並べた飯入れの四斗樽がゴロゴロと転げ回って甲板は白い飯だらけ。人はもちろん船酔いで食事もできない。船にも何度も乗ったが、あの航海ほど荒れて苦しんだ事はありませんでした。かくして船はマニラ港へ入ることができました。

敵潜の襲来もなく皆喜んでいたのですが、港へ入った途端に顔が曇る。港内に沈んだ日本船のマストの林立する数の多さです。幾隻とも計算できぬ程たくさんいます。敗戦の色の濃さを認識させられる悲しい光景に全員言葉も出ません。その中敵機の空襲に見舞われる。毎日の定期便で友軍機は皆無の由でした。

とにかくマニラまで来た。次はどこへ？ レイテは負けて終わった。バターン半島の守備が任務となりました。私の隊はトラック六台をもらい、バターン半島のパンテンガに向かいました。突然敵グラマン十数機の急襲を受け、燃料を積んでいた先頭車が被弾炎

上、無念にも三人の戦死者を出しました。その後は昼間の進行を避け、車両を分散遮蔽して日没を待ち、機関銃と軽機関銃を車上から射撃できるようにして、戦闘態勢を整えて微速前進を開始します。

途中、数回ゲリラの襲撃を受けましたが、よくこれを排除し、南サンフェルナンド・バラングを経て、十七日未明ようやく目的地のパンテンガ付近に到着しました。この間、夜間運転手が居眠りをして危ないこと、我々はヒヤヒヤして彼の居眠りを防いでやったものです。

やっと陣地を作り、住民を追い出して竹で組んだ小屋へ四、五人位ずつ入って住居としました。バナナ畑があり水牛が川に浮かんでいたり平和な村でした。ここに約半月いました。次は森の中へテントを張り約一週間警戒を敵にして過ごしました。

米軍が追ってくるので逃げるため、米軍の追撃が激しくなり、日本軍は山の奥へ奥へと逃げるようになりました。これから私達の最大の苦勞の始まりになったのです。思い出してもゾツとする。私達はナチブ山

(有名な山という)へ移動転進しました。

四周を敵、比島ゲリラ、武装住民などに取り囲まれた日本軍が、残存持久するためには遊撃戦闘はもとより食糧の収集が緊急事となりました。最初のうちは体力も気力もあり、それに武器弾薬も残っていたので、夜間に敵の幕舎に斬り込んだり、敵の物資輸送トラックを襲撃したりして、米軍給与の食糧を獲得できましたが、敵の警戒が厳重になり我が軍の体力が減耗するにしたがって、この方法は駄目になりました。

次に田野にある住民の作物の収奪に及んだのですが、これまた比島ゲリラや住民の反撃によってできなくなりしました。

一日一合に制限していた米も底をつき、塩も薬品も完全に無くなり、栄養失調の病人が多発し、特に雨期に入って負傷者、マラリア患者、赤痢患者の病状が悪化し死亡する者が急増しました。そして飢餓に迫られ、瘦せ衰えた兵士が食べ物を求めて、ジャングルの中を彷徨する有様となり、正に生き地獄の観を呈する

に至りました。

私も赤痢を患い、四人の戦友と共に自然療法で幸いにも元気になり治療し助かりました。またマラリアにも縁がなかったのです。一番困ったのは雨季に入ると黒色の山蛭ヤマビルが人に襲いかかること。地下足袋の小ハゼの間から三十四位入り込むのです。木の上から落ちて来て人間に食いつく。まさにもう処置なしの山蛭の恐怖でした。

しかし、雨季にも一つの助けがありました。それは白い初茸がとれて食糧を補ったことです。このジャングル内の敗残兵生活期を通じて最も心を砕いたのは火種を切らさぬように戦友グループで協力したことでした。以下で述べるすべての食物は火で調理をしました。

僅かに残った米に草を混ぜ、蛙、蝸牛カタツムリ等も入れて雑炊にする。バッタ、イナゴ、蟬セミは焼いて食べ、トカゲ(一メートル位の長いもの)、蛇も逃さない。もう何でも食べました。飢餓を防ぐに贅沢は言えません。そして最も美味かったネズミ料理があります。残り少

ない米を靴下に保存し、雑糞に入れて枕にして寝ていました。枕元で変な気配がするので右手を動かすと何かを掴んだ。眠っている戦友を起こして明るい所で見ると何とネズミである。握られた方も握った方も、もうびっくり仰天。グループ六人で相談して叩き殺しました。火で焼いて六人で分けました。私はキンタマ二個が当たりました。これが無上に美味しくて、平成の今まで戦友会で顔を合わせるとあの時のネズミの話が出て「うまかったのー」となります。

一方体力のない者からどんどん死んでゆきます。お互い骨と皮に瘦せこけて、一緒に水浴をする時「骸骨が動いている」とお互いに笑い合います。先に希望も楽しみもなく、加えて飢餓と悪疫との戦いに、生ける屍となって、それでも戦友愛を発揮して庇い合い協力し合って生き延びたのです。

九月一日頃か、敵機がピラをまいた。それで停戦協定を知りました。昨日の敵は今日の友です。ジャングルを出て山を下り、トラックに乗る。トラックに独力

では乗れないので三人、四人で引つ張り上げる。キャンプに收容され食事にありつきました。ここでようやく生き返りました。これまでの生活で不思議なことは髭や爪が伸びなかったことです。

かつては、関東軍の精鋭を自負した我が第十師団が、渡比一年未滿でこんな無惨な姿に変わり果てようとは、果たして誰が予想したか。

收容所へ入るのがもう一カ月遅れたら、皆全滅していたであろう。原子爆弾様々と唱えたい思いでした。

最後はマニラ市内のカランバン收容所へ入りました。使役として、どぶさらいや、病院患者の食事運び等をやらされました。この間嬉しいことに、我々の体力はメキメキ回復向上し、帰国の日を待ちわびるようになりました。

昭和二十一年十二月、待望の帰国ニュース。万歳。

無蓋車でマニラの港へ行進中、現地人の心ない人が我々に石を投げ「馬鹿野郎！ 馬鹿野郎！」とものしっていました。すべて隠忍自重。堪え難きを堪えて無事佐世保港へ帰国、上陸復員しました。

元気で無事帰れた。氏神様に御挨拶をしてお礼を申し上げ、びっくりして喜ぶ家族との対面は、時に昭和二十二年一月五日でありました。

結婚は昭和二十三年四月。子供は女三人。孫六人。妻も元氣。米、野菜は自給自足。老後の楽しみはカラオケ。父が盆踊りの音頭とりをしていたせいか唄が好きです。

先にも述べましたが、いまだに毎年の戦友会である時の仲間六人集まっては、ネズミを六人で食ってうまかった、と懐かしむのです。

昭和十九年八月、佳木斯出発時の第二大隊砲小隊の編成人員は四十四人であった。昭和二十一年十二月、佐世保港上陸時の人員三十人であり、その差十四人が帰らない英霊です。損害率約三割強、その全部が栄養失調、マラリア、赤痢等で、正に本編労苦の本質は飢餓・悪疫との戦いでした。

比島の山間に散華した若き英霊の無念とその遺族の傷心、不幸をこの機会に平和の礎の紙面を借りて語り

伝え、慰藉と慰霊の一助にも、と希うものです。

近づく八月十五日の全国戦没者追悼式典を控え、切に平和を祈念し、日本の安泰を希求するための誠を捧げて止みません。

ハイラル第八国境守備隊

島根県 藤原 幸一

私は大正七（一九一八）年九月二十二日生まれです。から昭和十三（一九三八）年徴集兵で、徴兵検査の結果、甲種合格で歩兵の軽機関銃兵になりました。

当時の我が家は農業で米作が主で、田一町歩、畑三反、山林が六町歩ありました。家族は母と私と弟（海軍戦死）妹四人の七人でした。父は私が十六歳の時に急死したので私は高小卒業後、直ちに家業を継ぎ、週二回の青年学校に通いました。

弟は私より三歳下ですが、昭和十三年五月、海軍に志願して呉の海兵団に入団しましたので、私が現役入